2019

LA NOUVELLE

No.22
PRINTEMPS

東京外語仏友会
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト 東京外語会気付
発行責任者　藤倉洋一（1970/ 昭 45）
2019.4.1 発行

第 24 回サロン仏友会

去る 11 月 18 日（日）恒例のサロン仏友会が本郷サテライトで開催され、67 名の出席者で賑わった。今回の講師は昭和 55 年卒の袖川裕美氏で、演題は「ある同時通訳者の悲喜こもごも－日本語と英語の狭間で－」。昨年の米朝首脳会談後のトランプ大統領記者会見や、マクロン経済大臣時代の来日インタビューなど注目の集まる場所での、文字どおり悲喜こもごものエピソードを披露された。

講演の後は、ボジョレ・ヌヴォの時間。今回は、例年より 1 ランク上のヴィラージュ・ヌヴォが予算内で購入できたので、また格別の味わい。少量ながら白のマコン・ヴィラージュ・ヌヴォも用意した。6 名の初参加の方にも大いに喜んでいただけたことと思う。いつものように、会場の後片付けも大勢の皆さんにお手伝いいただき、ありがとうございました。

（幹事 中村日出男記）

好評のワインパーティー

ある同時通訳者の悲喜こもごも

袖川裕美（1980/ 昭 55）

仏友会ではいつも諸先輩の話に感嘆し、こうした方々が日本を支えてきたことを誇らしく思っていた。それが今度は自分が話をすることになった。緊張する。自然に「このような高いところから、私のような若輩者（実年齢は若輩ではないけど）が失礼いたします…」との極めて日本的な挨拶が浮かんできた。さて、これを英語やフランス語にするとどうなるか。“ 高いところ ” って何だ？

「言葉」が好きだった。仏文学や翻訳モノを読むのが好きで、漠然と「作家」に憧れていた。だから外大の仏語は自然な選択だったが、卒業後は野村総研に就職。辞書編集のプロダクション会社を経て、カナダに留学（ブリティッシュ・コロンビア大学修士）。英仏公用語の国で英語も仏語もと思ったが、英語だけで力尽きてしまった。

その後の略歴は、通訳翻訳のサイマル・インターナショナル社内翻訳者。BBC ワールドサービス（ロンドン）で 4 年間放送通訳。帰国後はフリーで NHK・BS、BBC、CNN などの放送通訳や会議通訳。2015 年より愛知県立大学英米学科准教授。著書の『同時通訳はやめられない』(平凡社新書) は朝日新聞・天声人語ほか主要紙で取り上げられ、テレビ（『たけしのニッポンのミカタ』）にも出演した。

この中で特に触れておきたいのが外大のご縁である。サイマルで仏語の大先輩である “ 語学の天才 ” 早良哲夫氏が上司となり、いろいろと教えていただいた。また本を書き、大学教員になることを勧めてくれたのも外大の先輩（ロシア語）だった。皆、“ 運命の出会い ” である。

では実際にどんな通訳をしてきたのか 2 つ紹介したい。

まずは、シンガポールで行われた米朝首脳会談（2018 年 6 月 12 日）後のトランプ大統領による記者会見。集中力が要求される同通は複数の通訳者が 15 分程度で交替しながら行うものだが、この日は私ひとり。しかも話し手は “ 支離滅裂 ” な発言、記者への非協力的姿勢で知られるトランプ大統領である。

予想に反して、この日、トランプ氏は上機嫌だったが、発言内容については戸惑う事も多かった。例えば、北朝鮮の非核化にかかる費用について、I think that South Korea and I think that Japan will help them very greatly. と発言。私は help を「支援する」と訳した。問題ないはずだが、後に「日本が費用を負担する」と報じられていた。トランプ流は平和の手柄は自分、支払いは隣国でということらしい。

記者からは拉致問題についても質問が飛んだ。日本人にとって拉致問題は大きな関心事である。間違ったら致命傷になるので、Abe、abduction(拉致) という単語が聞こえると身構えた。また、トランプ氏は不都合な事は巧妙に話をすり替えるので、「今あの話をしていたはずなのに、なんでこの話になるのか」と思うこともあった。意味が分からないのが、相手の発言によるものなのか、自分の耳がまずいからなのかが判断できない。

結局 45 分もの同通を一人でやることになり、私にとっても「歴史的会談」となった。関係者から大変感謝され、極度の疲労が喜びに代わった。

2 つ目のエピソードは、マクロン大統領が 2014 年経済大臣として来日し、BS ジャパン「日経プラス 10」のインタビューを受けたときのこと（詳しくは拙書を）。英語の同通で事前収録。45 分間二人体制。質問は事前に用意されると聞いて引き受けたが、実際は私がマクロン氏の発言すべてを担当することになった。質問はフランス病の処方箋に始まり、デフレ懸念、週 35 時間労働の見直し等々 “ てんこ盛り ” で、そのすべてについて下調べをしなくてはならない。プレッシャーの余り、「インフルエンザになりたい！」。

だが本番は訪れ、ともかく終わった。しかも思わぬ贈り物とともに。次の予定へと急ぐマクロン氏を見送る私に、マクロン氏がウィンクされたのだ。えっ！プレッシャーも疲れもすべて吹っ飛んだ。インフルエンザにならなくてよかった。

マクロン氏は、左派政権ながらも右派的改革を断行しようとして、激しい逆風にさらされている。ウィンク事件で大ファンとなった私は、それでもトランプ氏に物申す西側の指導者としてこれからも期待したい。

振り返ると、言葉に触れる仕事をずっと続けてきて、作家とまでは言えないが本を出すこともできた。アップルの創設者スティーブ・ジョブズ氏がスタンフォード大学の卒業式の式辞で、connecting the dots（点と点をつなぐ）と言ったように、私も、目の前の点に必死に取り組むうちに、それが次の点につながり、道筋ができてきたように思う。

後は、退職したら 1 年くらいフランスで過ごすのが夢です。

渡辺昌俊元仏友会会長、レジオン・ドヌール勲章受章

中村日出男（1974/ 昭 49）

去る 12 月 17 日（月）、フランス大使公邸において、元仏友会会長の渡辺昌俊氏に対する叙勲式典が執り行われました。今回の受賞は、レジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ。同氏は既に 1995 年にフランス共和国国家功労勲章シュヴァリエ、2009 年に同オフィシエを受賞されていますが、今回はそれに続く 3 度目の受賞であり、長年にわたる日仏交流への積極的貢献が高く評価されたものです。

式典の始めに、ローラン・ピック大使より、在仏日本商工会議所、日仏経済交流会（パリクラブ）、国境なき医師団日本などにおける渡辺氏の社会貢献活動が詳しく紹介されました。とりわけ、大使が強調されたのは、同氏のパスツール研究所との関わりでした。

渡辺氏は、2002 年、当時パスツール研究所の所長を務めていたフィリップ・クリルスキー教授の要請を受けて、日本パスツール協会の前身であるパスツール研究所支援協会の副会長に就任されました。その後、日本パスツール協会会長として、さらには 2016 年に設立された日本パスツール財団の代表理事として、終始一貫、日本人研究者のパスツール研究所への派遣（フランス政府奨学生共同給費プログラム）や、感染症対策分野におけるパスツール研究所と日本側研究機関との日仏協力（多くのセミナー、シンポジウム等の開催や共同研究推進活動）に尽力してこられました。こうした情熱的な取組が、今回の受賞につながったものです。

ローラン・ピック駐日フランス大使より
Légion d'honneur を授与される

大使から胸に勲章を授与された後、渡辺氏が答礼のスピーチに立ちました。同氏は、ご自身の性格を「B 型でイノシシ年生まれの文字通り猪突猛進型」と表現。今はまだ財政基盤が脆弱な日本パスツール財団も、いつの日か、国境なき医師団のように大化けするのではないかと熱く希望を語っておられました。

その後、友人一同を代表してラオス・パスツール研究所所長のポール・ブレ博士が祝辞を述べ、乾杯の音頭を取りました。この日大使公邸に集まったのは、パスツール研究所及び財団関係者を始め、パリクラブの方々、笹川日仏財団の代表の皆さん、同氏のテニス友達、高校・大学の旧友及びご家族で、総勢 50 名ほど。長年の日仏交流人脈の豊富な渡辺氏にとっては、スペース上の制約とはいえ、ここまで絞り込むのはさぞかし大変だったことと思われます。今年が年男の渡辺さん、益々お元気で、日本パスツール財団の「大化け」に向かって活躍されますようお祈りします。

わが街とフランス

和賀千恵子（1970/ 昭 45）

1 月 12 日、所沢市で「折り紙ヒコーキ大会」が開かれた。これはフランス大使館等の後援による「フランス航空教育団来日 100 年記念」の行事だった。▼ 30 年程前、地元の新聞に、ある記事を見つけた時のことが蘇った。それは「両親が口ずさんでいたフランス国歌を告別式で流した。歌詞と意味を教えて欲しい」という内容だった。検索ツール等は無い時代である。「自分がやらねば誰がやる」と奮い立ち、早速資料を揃え依頼者に送り、感謝された。そしてある史実との関連が分かった。▼第一次大戦で日本は、日英同盟に乗じて利権拡大等の成果を出したが、空の軍備の遅れを再認識し、当時の航空先進国の「物、人、技」を求めた。その結果が「フランス航空教育団の来日 (1919 / 大正 8)」である。フォール大佐（J. P. Faure）以下、最大時は 60 名規模の 15 か月間にわたる一大ミッションとなり、日本の軍も民間も多くを学んだ。▼同教育団の活動拠点の一つが所沢飛行場であった。そこに同団が到着した時に、地元の小学生達が「ラ・マルセイエーズ」を歌って歓迎したのだ。詩的とは程遠いあの歌詞を果たして理解したかどうか。しかし、この子供達が晩年までフランス国歌を愛唱したのは事実である。▼実は、この教育団来日前も、この地にフランスからの風が吹いていた。日本人最初の飛行士の 1 人となった徳川好敏は、日本初の所沢飛行場開設（1911/ 明治 44）の前の年にフランスに渡り、機体の選定と買い付けを行い、操縦技術を習得した。彼が選んだファルマン航空社（Farman）の複葉機が日本の空を初めて飛んだ、と公式に記録され、人々の記憶に残った。▼それから一世紀、所沢は 30 万都市となった。「ファルマン」は老舗の名物菓子と通りの名称として残り、また嘗てフォール大佐等が通った割烹店のメニューには、「フォールカツレツ」が今も健在だ。

第 24 回仏友会総会のお知らせ

日　時：2019 年 4 月 14 日（日）午後 2 時～ 5 時
午後 2 時～ 総会、 2 時 30 分～ 講演
3 時 40 分～ 写真撮影＆懇親会

会　場：大手町サンケイプラザ 201・202 号室
（東京メトロ大手町　E1 出口）

講　師：淵上正幸氏（1969/ 昭 44）建築ジャーナリスト
株式会社シネクティックス代表

演　題：「現代世界建築を展望する：デザインの秘密」

淵上氏は神奈川県出身。卒業後、UNIVAC に入社、その後、新建築社、a+u などの建築出版社を経て独立。世界の建築物を長年にわたり紹介する活動に従事してこられました。その功績が認められ、昨年日本建築学会文化賞を受賞されました。氏が著した『ヨーロッパ建築案内 1~3』、『アメリカ建築案内 1~2』（TOTO 出版）は建築関係の大学生や若手建築家のバイブルになっています。建築界において、執筆＆出版、講演、インタビュー、建築ツアー、建築家コーディネートなどの活動をしてこられました。

昨今、多くの斬新な建築が話題になったり脚光を浴びたりしていますが、経験豊富な氏の解説による海外建築の世界を楽しく見せていただけることと思います。

ぜひお誘いあわせの上お出かけください。

参加費：5,000 円
2019 年度分通信費 1,000 円も同時に受け付けます。

申込み：4 月 6 日（土）迄
メルアド保有の登録会員には e-mail で、それ以外の登録会員には往復はがきでご案内しています。

申込み先：藤倉洋一：fujikura1639919@waltz.ocn.ne.jp
Tel/Fax 048-822-4540
勝亦杏子：anzuko@k08.itscom.net

≪パリ便り≫

「Gilets Jaunes」運動真っただ中

竹本彩（2005/ 平 17）

2000 年に西ヶ原最後の新入生として外語大に入学し、2005 年春に府中から卒業しました。卒業後は中堅の国際物流会社に就職、そのまま 15 年目を迎えようとしています。フランスとはすっかり疎遠になっておりましたが、十数年ぶりに来てみるとカフェのトイレがきれいになっていたり、地域圏が再編されていたり、”twittez-nous”” ça fait le buzz” などの新表現が生まれていたり…とギャップを楽しみながら生活しています。フランスは米国、ベトナムに続く 3 回目の海外勤務です。2017 年の旧正月に 25 度のハノイから零下 5 度のシャルルドゴールに降り立った瞬間の脳天を突く寒さは一生忘れないと思います。「パリ支店」といえど職場はロワシーの滑走路横の貨物地区。飛行機が頭上を飛んでゆくオフィスで（飛行機好きには最高の環境といえます）7 人のフランス人同僚と、日仏の物流品質格差を埋めるべく毎日胃を痛くしております。

さて 2019 年 2 月、フランスは Gilets Jaunes 運動 (以下 GJ) と呼ばれる「革命」の最中にあります。革命で思い出すのは、1 年次の地域基礎の講義で工藤先生がフランス国家の象徴「マリアンヌ像」と「フランス人は今でも家具や石畳であっという間にバリケードを作る」というお話をして下さったことです。在学中は留学の機会には恵まれずフランス生活は今回が初めてですが、マリアンヌはビザ申請から生活のあらゆるところに登場し、その度に講義を思い出してニンマリ。駐在員の仲間内では「マリアンヌの封筒が来ると面倒が起こる（※役所か税金か交通違反の罰金）」という冗談も飛び出すほど。それだけに GJ に凱旋門のマリアンヌ像が壊されたのは中々ショッキングな映像でした。バリケードについては学生当時「いくら何でも 21 世紀に」と半信半疑でしたが、石畳を剥がして投げる GJ は言わずもがな、教員の体罰への抗議でも警察官の暴力への抗議でも本当にバリケードが作られ、これまでの人生でバリケードなど見たこともなかった私は感動すら覚えました。

それでは GJ のデモ、パリ在住の一応「中の人」として何を見たか。第 1 週は土曜に高速道路と大きい交差点がデモで通行止めらしい、くらいの話で「またいつもの」程度の感覚でした。しかし第 2 週から人数が増え、シャンゼリゼ通りは燃え、凱旋門は落書きだらけ。やがて車が燃やされ、店が襲われ、催涙ガスが撒かれ、装甲車が出動するようになりました。凱旋門から 16 区にかけては日本の企業や団体の事務所、在住者も多いので、事務所のガラスが割られた、催涙ガスを吸ってしまったという知人が何人かいました。土曜は落書きだらけだった凱旋門が月曜朝にはすっかり元通りになっている様子からは、社会主義国ベトナムで馴染んだ「国の威信をかけた取り繕い」の匂いを感じました。ノエルあたりでなあなあに終結するだろうという私や同僚を含む大半の期待を裏切りデモは年が明けても続き、大統領自ら市民と話し合いの場を持つも焼け石に水、毎週末動員される警察官は労働環境に抗議、女性主導の ”Femmes Gilets Jaunes”、はたまた GJ の暴力に抗議する ”Foulards Rouges” なる団体まで現れ、デモがデモを呼び落としどころ不明のカオス状態です。

経済活動への影響も軽くはなく、物流会社である弊社では GJ が高速道路のゲートをブロックして工場に原料を届けられない、完成品が船の出港に間に合わないという事案が何件か発生しました。街中では書き入れ時の 12 月に毎週土曜日閉店することになった小売業が大打撃。救済のため例年よりソルドが延長されたそうですが、今冬は値下げ幅が少し大きかったように感じました（買う側にはラッキー）。エリゼ宮に近いサントノレ通りのお店では、毎週金曜に警察が回ってきて週末のデモの注意喚起、「警察は確かに警告しました」という念書にサインまでさせられたそうです。

一方で恐ろしいのは「人は慣れる」ということです。当初こそ毎週土曜は外出を避け衝撃的なニュース映像に釘付けでしたが、そのうちあえて TV をつけることもなくなり、今では気を付けつつも外出するようになってしまいました。そしてふと革命や戦争に巻き込まれた一般市民もこうだったのかも、と思い至りました。世界情勢がやや不穏な昨今ですが、知らぬ間に慣らされとんでもない事に巻き込まれていた、ということにならないよう願うばかりです。

（写真はプロヴァンス地方のラベンダー畑を背景に筆者）

次の 10 周年を目指して 新しい扉（Nouvelle Porte）を

小幡君枝（1977/ 昭 52）

昨年 2018 年 12 月、懐かしの恵比寿アートカフェフレンズで、「デビュー 10 周年＆初 CD 発売記念コンサート」を開催させて頂きました。外語大仏友会、同エンタメ会の皆様を始め、友人や知人、教室の生徒の皆様等、これまで私を支えて下さった多くの方々に、感謝の気持ちで一杯です。「シャンソンを始めたきっかけは何ですか？」とよく聞かれます。一瞬戸惑いながらこう答えます。「頭上にチラシが落ちてきたのです」と。あれは 1999 年の晩秋の事でした。大学を出てからほぼ 20 年が経っていました。当時、子供の病気等様々な問題を抱え、「プチキッチンドリンカー」だった私は、広告がずっしり挟まった新聞を手に取ると、それを広げながら、フラフラとソファまで行き仰向けにドサッと寝転がりました。頭上に落ちて来た広告の山をかき分け振り払うと、最後に残った一枚のチラシに目が留まりました。そこに「NHK 文化センターシャンソン教室」と書いてあったのです。・・・シャンソン？長い間、歌を歌っていなかった自分に気がつきました。すぐ入会、そして初めてのレッスンを受けた時、私は暗い長いトンネルの中に一筋の光を見つけたように思ったのです。それから 3 年間この日本語シャンソン教室に通い、自分で原曲を聴き、原詩の意味を探るという「楽しくてたまらない課題」を見つけたのでした。その後フランス人の先生に師事、2006 年の J'aime chanter コンクールでのグランプリ受賞でパリに滞在。2008 年には、シャンソン評論家大野修平氏のご紹介で、恵比寿のアートカフェフレンズで初ステージを踏みました。55 歳になっていました。その後都内各地でライブ出演やソロコンサート活動を続けるうち、いつしか 10 年の月日が流れました。今私は、音楽活動の傍ら、フランス語で歌うシャンソン教室 Nouvelle Porte（新しい扉）を主宰しています。

夢にも思わなかった歌手としての人生を歩んでいますが、振り返ってみれば、見えない糸に紡がれた帰結（私は、「ご先祖様の思し召し」と呼んでいます）だったのかもしれません。母の影響を受けての幼い頃からの歌好き、大学の視聴覚メソッド「クレディフ」で生きたフランス語を学んだこと、ロータリー財団の奨学生としての南仏留学での様々な体験、結婚や子育ての長い期間を経ての上記のチラシ事件。そして実はもう二つ特記すべきことがあります。一つは「占い師の言葉」。それは、どちらの道に進むべきか悩みに悩んでいた時、外語同期の友人の占い師さんの元を訪れると、彼女はこう言ったのです。「あなたがこれまでに流した全ての涙は、シャンソンを歌うために神様が下さったプレゼントなのです」と。もう一つは、偶然に出会った決定的な言葉です。それは後に教室の名前にもなったのですが、アメリカン・リーグの某監督の次の言葉でした。「閉じかけたドアをこじ開けようともがいていると、すぐ隣に新しい扉が開いていることに人は気がつかない」。私は、「新しい扉」を開けることを決心しました。

今、さしあたっての新しい扉は、CD の第 2 弾でしょうか。そして遠くは、あと 10 年後、「歌手生活 20 周年記念コンサート」開催・・・。　今年はスタートの年です！

2018 年度 96 回外語祭

語劇「シェルブールの雨傘」を観て

岩本憲和（1970/ 昭 45）

卒業してから、西ヶ原の学び舎を訪れたことは一度もなく、ましてや多摩キャンパスは初めての訪問。在学中に外語祭で当時流行りのフォークデュエットコンビを作り、オープンカフェまがいの出店をしたことはあっても、語劇を見たことは一度もない。ということで「初めてづくし」の仏語劇鑑賞はまさに新鮮であった。

まずは「シェルブールの雨傘 (1963)」を観たのか観ていないのかも思い出せず、デジタルリメーク版を借り自宅で鑑賞した。何よりも、ミュージカル仕立てのこの映画をどうやって語劇にするのか、興味津々で幕開けに臨んだ。

なるほど、音声（音楽）は原画どおり、セリフである歌は後輩演者がアテレコで、鍵となる要所要所のシーンを良く考え抜いて選んである。原作と異なるのは、数回現れるダンサーチームの踊りだが、その登場も上手に組み込まれている。振付もなかなか良く、また歌では、Geneviève の母親役がハリのある良い声を披露してくれた。

ストーリーは皆さんご存知の通りだが、気付けばどっぷりと舞台に引き込まれてしまった初めての語劇体験であった。何といっても、このフランス発のミュージカルはあの Catherine Deneuve の出世作でもあり、世界的にヒットした映画作品である。実はこの観劇感想文をまとめていた年明けの 1 月下旬、この映画の音楽担当であり、フランスが誇る巨匠 Michel Legrand の訃報が飛び込んできた。偶然とはいえ、不思議な縁の連続であった。

語劇関係者と和賀副会長（前列中央の筆者の後方）

昔日の青春　**佛友會々報**

80 年のタイムカプセルを開ける　17

坂井英俊（1965/ 昭 40）

鷲尾猛氏が、昭和 10 年版に「嗤」と題する随筆を載せておられるので要約抜粋してみたい。4 年後には、軍部が色を失ったノモンハン事件が起きるが、国民の大半には何も知らされず、ただ一層の戦意高揚が叫ばれていた。

＜このたび国際映画祭に出した我が国の宣伝映画「日本の四季」が外国人の嗤を買ったと。調べてみたら、人間が家鴨のやうに泥田の中を這い回る田植えのさまが彼ら機械化耕作人には可笑しかったのだそうだ。我国の国際観光局は周章狼狽、この場面をカットしてこんな国辱的場面をカットするだけの時間の余裕のあったことをこの上なく喜んだという。

現代（昭和 10 年）の日本人はいわゆる有識であればあるほど、西洋文明唯一絶対の催眠術にかかっているらしい。我らはこの催眠状態から覚めなければいけない。覚めてみれば今まで見ていた世界がどれほど偽り作られた世界であったかがわかる。覚めた目で見れば我が国際観光局を狼狽させた外国人の嗤も、畢竟わずかの金を貯め込んだルンペンが嘗ては兄弟と呼んだルンペンの今なお無一物なる姿を久しぶりに見て思わず漏らした優越感、人間性の中に潜む昔ながらの浅ましい成り上がりもの根性の暴露でしかない。しかし私はこれを責めることができない。これは我々現代日本人が共に負わされた運命であり、殊に外国語の習得に専ら従事する我々自身に於いて、この傾向の一層強いのを心得ているからである。事実、我々は、一方に於いてはややもすれば国を忘れ己を忘れて忘我の催眠状態に陥り、しかも他方においてはわずかなものを所得することに因って自己の周囲を蔑視せんとする成り上がりもの根性を養成される二重の危険に絶えずさらされておるのである。この危険から我々を救いうるものは不断の戒心と不断の努力でなければならない＞

氏の言う運命、すなわち日本人の異文化憧憬とは、遠く飛鳥時代以前からのことである。正倉院の文物の多くは唐の文化財ないしその遜色ない模倣作品であり、都の造営さえもが、すべて首都長安の流儀に従っていた。のち種子島に渡来した鉄砲も、日本人の経験的技術はたちまち渡来品を超える域にも達し、その大量生産に入る。近くは戦後に始まった民主憲法でさえ、周知のように軍国日本のオリジナルではなく占領軍から来たというものであった。

また「語学とは単に道具である」と一見軽んじたかのような言い方が外語開校以前より今日まで言われ続けてきた。が、日本の外国語学とは「道具」どころか、理をきわめ異文化の基礎に肉迫して外国文明の合理を学び取るための苦難の常道なのであった。文明の基礎を学んで国産化せんとする野心は語学習得に沿って達成されていった。西洋医学、哲学、科学と、すべての基礎学が語学から出発し、日本人の経験と直感、努力がそれを具現していった。とりわけ西洋的合理・科学の精神を、日本人は根本から学び取ろうと腐心した。それまでの「学問」はといえば、一般には四書五経や仏教などに始まる人格の陶冶、生活哲学や経世の哲学であり、また漢詩や花鳥風月の嗜みであった。そこへ黒船とともに西洋の合理・科学・実学・芸術が津波のように襲ってきた。それらに圧倒されながらも、不屈の日本人はすべてを正面から受け入れ、やがて「富国強兵」の新しい国家を夢見て、励みに励んだ。その結果、なんと軍事力で世界の強大国ロシアを打ち破ったのである。この恐るべきアジア小帝国の勝利は全世界列強の度肝を抜き、「大日本帝国」青少年の意気は天をついた。

「斎藤英和」で受験界にも名高かった斎藤秀三郎は傑出した英語学者であり、殊に前置詞の研究成果では海外にも知られていたというが、ある日ロンドンから来日していた若い英国人教授の異論に対し「毛唐に英語がわかってたまるか」と言い放ったと伝記にはある。気迫に満ちたこの啖呵がその場の冗談であったにせよ、これはおそらく明治が育てた日本人に顕著な武士道の発露でもあったろう。日清・日露の役を勝ち抜き満州建国までをやってのけた小帝国の民は、まことに気位が高くなっていた。だがその奢りは軍部の専横とともに次第に大きな誤算・錯覚を国内に積み上げ、ついには諸大国を侮った無謀な挑戦に出て、数年後には無残な敗戦、壊滅の非運を招いた。「ジャップに民主主義がわかってたまるか」などと言われながらも、歯を食いしばって再びゼロ地点からの苦難の道のりを歩むことになろうとは、昭和 10 年当時の誰が予想しえたであろうか。

＜次回へつづく＞